

『狭衣物語』源氏宮像

——狭衣はなぜ源氏宮に恋するのか——

Genjimoniya in "SAGOROMO Monogatari"

Why does Sagoromo love Genjimoniya?

博士後期課程 日本文学専攻 二〇〇九年度入学

金 澤 典 子

KANAZAWA Noriko

【論文要旨】

『狭衣物語』の主人公狭衣の永遠の思慕の女性は妹として育てられた源氏宮であるが、源氏宮その人自身の登場場面があまりなく、その感情もほとんど書かれていないことが、これまで問題視されてきた。本稿では、それが理想の女君を創造するために『源氏物語』から学んだ方法であることを述べ、主として深川本の本文を読み解くことで、源氏宮の性質を明らかにする。彼女の特質を物語中の語で表現するのであれば、「愛敬」が相応しい。『狭衣物語』は主人公狭衣と源氏宮にだけこの語を用いており、人々に幸せ感といったものを与える性質のことである。狭衣が孤立感をもつように、源氏宮も周りの人々からは切り離されてお

り、やはりともに貴族の慣習的な価値観からは独立した自らの鑑識眼を備えている。しかし、源氏宮から人々への関心が失せることはない。源氏宮の美しさはそのような内面性に支えられており、狭衣はそのような彼女に恋をしている。源氏宮の成長は、自らの運命を生き抜くという決意に見られる。それまでの平安朝の女君が恋や生活の中で閉じ込められていたのに対し、源氏宮のこのような生き方は清楚で斬新なものに映ったにちがいない。

【キーワード】『源氏物語』、藤壺、女源氏、齋院、女君の成長

一 はじめに

『狭衣物語』の名の由来がその男主人公の源氏宮への思慕を詠んだ「いろいろに重ねては着じ人知れず思ひそめてし夜の狭衣」(①五四頁巻一)⁽¹⁾によるものであるにも関わらず、源氏宮その人自身は、登場場面があまりなく、その感情もほとんど書かれていない。⁽²⁾先行研究は、その理由として「作者の仕える現実の齋院六条禊子内親王に対する崇敬」⁽³⁾を挙げている。すなわち、禊子内親王の母(姫子女王)もしくは内親王自身を源氏宮のモデルとしたために、その内面を描けなかったとするのである。⁽⁴⁾

しかし、稿者には、そのような結論は、物語世界とそれを生みだした社会を錯綜しているように思えてならない。源氏宮は齋院となるが、禊子内親王の母姫子は齋院となることはなく、また禊子内親王自身は八歳

で卜定されている。齋院を十年余り経験し、いまは齋院から一歩ひいた位置にいる禊子内親王が、はたして源氏宮に自分を重ねていたのだろうか。『狭衣物語』の中では、齋王となってからの源氏宮にそれほど筆を割いてはならず、むしろそこに行きつくまでに重点が置かれている。歌と物語をこよなく愛し、物語の歌合せを主催した禊子内親王が、物語の登場人物が齋王になるからといって心中を語らせないことを特に望んだという積極的な理由は思いつかない。『源氏物語』の朝顔齋王について、その心中が語られていることに、禊子内親王が不愉快を感じたというようなことを物語る微もいまには残されていない。

その一方で、男君への感情が明瞭な形で描かれないヒロインには、『源氏物語』藤壺中宮があり、そのことも考慮に入れれば、現代の読者にはアンバランスにも見える源氏宮の描かれ方は、理想の女性を創造する方法であったにちがいないと思われる。三谷榮一氏は「賜姓源氏である源氏宮は、いわばあまり例のない「女源氏」の物語であって、『男源氏』の『源氏物語』に匹敵する作品をめざしていた意気込みが窺え⁽⁵⁾」という。『狭衣物語』研究の第一人者であった三谷榮一氏をして、そのように思わせる要素が源氏宮の造形にあるということではないだろうか。

三谷榮一氏は、異本間の本文の相違も考慮に入れながら、若い主人公とその妹として育てられた源氏宮の、最も自然な心理描写を指摘するという方法で、源氏宮像を精力的に分析した⁽⁶⁾。しかし、それでもなお、三谷榮一氏自身がいう『女源氏』の物語とはどのようなものであるのかが明瞭にはなっていない。

堀口悟氏はそれまでの研究をまとめる形で、養女である源氏宮の置かれた立場の難しさ、「狭衣と対立したときには、自分の味方になってくれる人が全く居ない現実⁽⁷⁾」を指摘した。しかし、堀口悟氏の分析は十四歳の源氏宮で留まっており、『狭衣物語』はそのあとの十年を描き続けていくのに対して、三谷榮一氏のいうように「女源氏」の物語となるのか、それとも、貴族社会を生き抜く養女の物語として進展していくのかまでは言及していない。

本稿では、このような課題を考察して、感情を露わにしないヒロインの人物像の一端を明らかにしたい。狭衣が源氏宮に恋情を持ち続けることを読者に納得させ得るほどの魅力を源氏宮は持つように描かれているのだろうか。源氏宮に託された理想性を探ることが、本稿の主眼である。

二 源氏宮創造における『源氏物語』からの摂取

『狭衣物語』が『源氏物語』に多くの想を得ていることはよく知られており、たとえば飛鳥井戸女君は夕顔と浮舟の折衷であると言われ、女二宮物語は女三宮、落葉宮物語に学んでいる⁽⁸⁾。そうであるならば、源氏宮の造形もまた『源氏物語』に拠る側面があるのではないだろうか。源氏宮は狭衣にとつての理想美の基準であるとともに、永遠の恋を誓う相手でもある。そして、『源氏物語』の光源氏にとっては、父桐壺帝の中宮に立った藤壺が思慕を寄せる女性であり、その叶わない恋心ゆえに紫上や女三宮を手元に引き寄せることになる。主人公にとつての理想的な女君の創造のために、『狭衣物語』は藤壺の描き方を倣おうとはしな

っただろうか。

『源氏物語』では、光源氏から藤壺への激しい思いが語られるのとは対照的に、藤壺から光源氏への恋情は明示的には描かれていない。阿部秋生氏は「藤壺の宮を唯一絶対の女性とみている源氏の心根と藤壺の宮の胸中とが共鳴することはなかったであろう」といい、また「あさまし」という語に嫌悪感が伴うものだという一般的な理解から「藤壺の宮主従が、口をそろえて『あさまし』『宿世の業』と感した」というのであれば、「藤壺の宮には、源氏を、愛情の対象として見る気持ちはないというべきなのではあるまいか」とする。山崎和子氏は『源氏物語』中の「おほかた」の語法から藤壺の会話文を分析したうえで、須磨巻に藤壺の源氏への想いを綴る場面があることを指摘しながらも、「この須磨巻における心情表白を俟たずとも、物語の構想上藤壺に源氏への恋情がなかったとは考え難い。それは明白に語られなかったのである」と結論付けている。千年の時を経て、そのような物語の根幹を議論できることが、『源氏物語』のもつ魅力のひとつであろう。そして、『源氏物語』から半世紀ほど後に成立した『狭衣物語』もまた、そのような藤壺の描かれ方に、理想の女君を創造するための手法を見たかもしれない。『狭衣物語』においても、狭衣から源氏宮への慕情は繰り返され、逆に、源氏宮から狭衣への思いは明言されないのである。

源氏宮ほどの程度に藤壺を意識して造形されているかを、まずは見ておきたい。『源氏物語』藤壺については、他の女君とは異なり、「女」の呼称は使われていないことが指摘されている¹³。しかし、『狭衣物語』では、「女君」や「女」と書かれるのは飛鳥井女君だけであり、それは、

狭衣の主だった恋の相手が、飛鳥井女君を除いて、皇女であることに対応している。

源氏宮の呼称をおえば、「源氏の宮」「宮」、齋院に卜定されてからは「院」が一般的に用いられている¹⁴。「武蔵野のわたりの夜の衣」という和歌文脈で指示されたり、狭衣との関係から「紫」などと呼ばれたりする例もあるが、このような比喩的呼称は、飛鳥井戸女君に対しては「道芝の露」が用いられており、源氏宮の呼称が他の女君に比べて特異であるという傾向はみられない。また、いずれも主人公狭衣の視点に立った呼び方であることも共通している。

『源氏物語』における藤壺の特殊性は、桐壺巻で、藤壺が光源氏とともに輝くものとして挙げられることではないだろうか。主人公と同列に並べられるのは、桐壺帝の寵愛する二人だからであろうし、一方では、その輝く者たちが物語世界の改革にかかわる主要人物であることを主張してもいるだろう。あるいはまた、その二人にとって、恋に同等の相手を選ぶのならば、その二人が互いを認め合う関係であることをも示していると言ってよいのかもしれない。一方、『狭衣物語』では、狭衣を「光」るものとするのに対し、源氏宮に対しては微妙である。深川本、流布本など多くの異本において、巻二では「宮の御容貌、このころ盛りに整はせたまひて、まことに光るとはこれを言ふにやと見たまへり」(巻二①二七三頁)と表現されて、女性としてねび整った源氏宮が、『源氏物語』藤壺のように、輝くものと描かれているのだが、巻四では、語り手は若宮に対して「折しも、大人びたまふままに、あたりも光るばかりの御顔にて」(巻四②三六七頁)と表現しており、この二人への用例は、

狭衣のような存在するだけで「光」となるような絶対的なものではなく、あふれるばかりの生命力をとまなうことといった印象を受ける。堀川大臣の発話として「我も又、光るといふも」(内閣文庫本、岩波日本古典文学大系二四頁、深川本にはない)という用例も見られ、ここでは皇室の血を受けるものといった理解が適切であるように思われる。『狭衣物語』は、狭衣にはこの世の救世的な役割を担わせようと「光」の語を多用するのに対して、源氏宮に対してはそうではないのである。¹⁵⁾

しかし、それでも、源氏宮は『源氏物語』藤壺を意識して書き始められただろうと考えられる。源氏宮が登場したとき、狭衣に寄り添う立場から「まみ、つらつきなどのうつくしさ」(巻二①一七頁)と、その外見が書かれるのに対して、『源氏物語』では、桐壺帝が藤壺を(故桐壺更衣と)「つらつき、まみなどは、いとよう似たりし」(『源氏物語』桐壺巻④四四頁)と言っている。桐壺帝に仕える典侍は「亡せたまひにしに御息所の御容貌に似たまへる人」(『源氏物語』桐壺巻④四二頁)と藤壺を紹介したのだが、桐壺帝には「つらつき、まみ」が目にとまったのである。『狭衣物語』巻一の後半では「まみ、額髪のかかり、つらつきなど、言ひ知らずめでたし」(巻一①五八頁)、巻三では「まみ、頬つき、髪ざし、御髪のかかり、げに光とはこれを言ふにや」(巻三②一三七頁)と、「まみ」「つらつき」だけでなく「髪ざし」「髪のかかり」の列挙が繰り返され、また、巻一に限定すれば「はなばなとにはひ満ちたまへる御顔」(巻一①五八頁)「いとわりなしと思したる御顔のうつくしさ」(巻一①九二頁)と顔そのものが主人公の目にとまることを思えば、意識的であるか無意識的かは判定できないものの、源氏宮を描こうとする初期の段階で、

『源氏物語』藤壺がステレオタイプとして置かれていた可能性は否定できないだろう。

源氏宮の創造に、『狭衣物語』は光源氏にとっての藤壺のありようを摂取しようとしていたことがわかるのは、巻四の逸話である。¹⁷⁾飛鳥井姫君のもとに届けられた故飛鳥井女君の絵日記を、源氏宮にだけは見せたいと狭衣が思うこと(「齋院ばかりには、いみじう御覽せさせたまはしきけれど」(巻四④四〇二頁))は、光源氏が須磨での絵日記を藤壺だけに「中宮ばかりには、見せたまつるべきものなり」(『源氏物語』絵合巻②三七八頁)と表現することからの明らか引用である。¹⁸⁾

藤壺が冷泉帝を懐妊して以降、光源氏は藤壺との肉体的に親密な関係がないまま彼女を死ぬまで慕い続ける。一方、狭衣は一度たりとも源氏宮の身体に触れることのないまま、永遠の思慕を寄せる。身体とは切り離された恋の物語を創り出す動機には、光源氏と藤壺とのこのような恋が下敷きにされていたと考えられなくもない。

藤壺が光源氏にとって理想の女性であったように、源氏宮を主人公にとって永遠の理想の女性として創造したいということ、そして、その女君が主人公と結ばれないことは、『狭衣物語』の当初の想定にあったことだろう。肉体的には結ばれずに永遠の思慕の対象となる女君を創造するとき、『狭衣物語』の原本には、『源氏物語』正編の藤壺だけでなく、宇治十帖に描かれた女一宮、大君がいた。女一宮は、狭衣が源氏宮に恋を告白するその場面で生かされている。夏であるため源氏宮は単衣姿でいるのだが、蕪が垣間見た女一宮もまたそのような姿でいた。深川本では、「源氏の女一宮も、いとかくばかりえこそおはせざりければや、

薫大将のさしも心留めざりけん、とぞ思さる」(巻一①五七頁)と説明が付けられている。女一宮と薫の交渉は多く語られず、それを反映してか、『狭衣物語』にはそれ以上の撰取は見られない。

源氏宮を創造するときに、大君の造形を倣ってもよかったと思うが、その積極的な影響関係をみることはできない。その理由について推測すれば、大君は皇女であるにも関わらず、光源氏の子息だと世間の人には思われている薫と対等な関係で描かれることがないからではないだろうか。大君は、薫とたとえ結ばれることがあったとしても、正妻の立場には成りえず、薫の庇護におかれる立場の女君であった。一方、藤壺は桐壺帝の中宮であるため、平安時代の文化の中では光源氏の正妻には決して成り得なかったが、当世の人々に「光」と称えられているという意味で同じ水準で語られている。『狭衣物語』が、主人公狭衣の恋情を受け入れない源氏宮を、狭衣と同様に、最高の美を備えた人物として描こうとしていることは明らかであり、そのために、『源氏物語』の光源氏と藤壺のそのような意味での対等性が参考になっただろうと思われるのである。三谷榮一氏のいう『女源氏』の物語」としての「意気込み」をこのような点に読み取ってもよいのかもしれない。

三 源氏宮の美

源氏宮をどう描くかについては『源氏物語』藤壺に学んだとしても、源氏宮と藤壺は異なるタイプの女人である。藤壺は入内してからその死までが描かれ、死霊としても登場するのに対し、源氏宮は十代半ばから二十代半ばまでの十年ほどが書かれているにすぎない。藤壺が冷泉帝の

母宮としての変貌を遂げることは周知のことであるが、源氏宮については少女から斎院としての任務を担う皇女へと変容する様しか読者は知り得ないのである。著名な冒頭シーンの白居易の詩により象徴されるように、少年少女から大人への成長が『狭衣物語』の描きたかったことの一つであるのかもしれない。

源氏宮が、藤壺とは異なる性質の持ち主であると感じさせる理由のひとつに、「きよら」の用法の違いを挙げておきたい。『源氏物語』は最高の美を「きよら」で表しているが、『狭衣物語』におけるその形容詞の用例は、堂の飾り、内裏の壺、衣装などの静的なもの、もしくは、行事のさまに限られている。⁽¹⁹⁾『源氏物語』から半世紀以上を経て成立した『狭衣物語』においては、「きよら」は理想の人物像に求められる特質ではなくなっているのである。「きよら」に代わってどのような性質が好ましいとされているのであろうか。

源氏宮は生まれたときから「類なくうつくしき女宮」(巻一①一七頁)であったと、物語はいう。先に見たように、「まみ、つらつきなど」(巻一①一七頁)、すなわち、顔のつくりがそもそも愛らしくて、「はなばなとにはひ満ちたまへる御顔」(巻一①五八頁)とある。さらに髪が多くて美しい(「御額髪のゆらゆらとこぼれかかりたまへるに」(巻一①五七頁))のだが、その髪と顔とのバランスがよい(「まみ、額髪のかかり、つらつきなど、言ひ知らずめでたし」(巻一①五八頁))。特に、顔の輪郭を鮮明にする、額にかかる髪が、狭衣にはとても印象にのこるらしい。先に述べたように、「額髪のかかり」は、源氏宮の外見の素晴らしさを語るのに繰り返されるのである。

源氏宮は動作が洗練されている。「御手つきなどの、世に知らずうつくしき」(巻一①一八頁)と、あまり激しい活動をしない平安朝の女君の中で、手は確かに目につく部位であり、狭衣はそこにも気が取られる。

まだ成長しきる前の源氏宮について、物語の語り手は「十に四五余らせたまへる御容貌、ほの見たてまつらん、武士なりとも、心は必ず着きぬべき」(巻一①二八頁)と言う。荒々しい心をもつものであっても魅せられてしまう質を、源氏宮はもっているというのである。

源氏宮の美しさ、洗練された態度、内面性は、身につける衣装の、通常では美を感じないものまでも優美に変えてしまい(以下の引用Aの傍線箇所)、逆に、豪勢な衣装を身につけるべきときにも、衣装に圧倒されることがなく、優雅に着こなすのが源氏宮である(以下の引用Bの傍線箇所)。

A 皇太后宮の御形見の色にやつれさせたまひて、このごろ枯野の色なる御衣ども、濃き薄きなるに、同じ色のうちたる、われもこのうの織物重なりたるなども、人着たらばすさまじかりぬべきを、春の花秋の紅葉よりもなかなかなまめかしう見ゆる、人がらなめりかし。ひきもつくるはせたまはぬ寝きたれ、御髪のコぼれかかりたる肩のわたりなど、なほなほさまことに見えさせたまふ。人々の、山作り騒ぐを御覧じて、うち笑ひうちとけさせたまへる愛敬、雪の光にもてはやされて、まことにあなめでたと見えさせたまへり。

(巻一①三三九頁)

B 内裏わたりの交らひのほど、いかにめでたからましと見えわたさる

るに、御前には桜の織物の重ねたる、紅うち、桜・萌葱の細長、浮線稜の山吹の小桂などの、ところせくものはかばかしげなるを、いかなるにか、たをたとあてになまめかしう着なさせたまひて、常よりもひきつろひておはします。人々の参りたるを、御几帳のほころびより御覧じなす御ありさまも、光るとはこれを言ふにやと見えさせたまふも、上はいかが見はなちきこえたまはざらんと見ゆれば、まいて、大将の御心の中、ことわりなり。(巻二①二八二頁)

Aの場面における源氏宮は、血のつながった叔母(女二宮の母宮である皇太后)の死を経験したばかりである。しかし、源氏宮は喪服を身に着けながら、女房などに目配りし、くつろいで笑っているのだが、狭衣にはその「愛敬」のある様子がとても素晴らしく見える。

「愛敬」は、主人公狭衣に対しても用いられる特徴である。心の深層を人には見せずに、人の心を和ませる狭衣に対して、物語はこの語を用いている。そして、源氏宮もまた、叔母を失う悲しみがたとえ深くても「愛敬」があり、その姿は、女房や周囲の人々に安心できる状態、あるいはもっと積極的に幸せ感といったものを与えている。少なくとも、狭衣にはそのように見える。狭衣が源氏宮に対して恋情を駆り立てられるのも、外見やしぐさの美しさに加えて、源氏宮がそのような性質を備えるからなのだろう。「愛敬」は『狭衣物語』においては人の最高の美質を表現する語だと見做してよいのだと思う。⁽²⁰⁾

Bは、神の花嫁となるべき源氏宮の美しさを描くもので、狭衣の視点ではなく、語り手の評価である。「たをたと」とは、しなやかな様を

表現する擬態語であり、「いかなるか」という挿入句からもわかるように、通常では「たをたをと」であることは考えられないのに、源氏宮はそのように優雅に衣装を着こなしている。このことは、巻一で「武士なりとも、心は必ず着きぬべき」(巻一①二八頁)と対応すると考えてよいだろう。「強いもの」を和らげるのが、源氏宮という人の特質なのである。

さらに、ここで源氏宮が几帳のはころびから人々を見ていることも重要だと思われる。神の花嫁になるといって自分にとって特別な状況にあっても、彼女の関心は自分だけに向いているわけではない。気持ちに余裕があるのだろうか。このような点を語り手は高く評価している。

そして、上述のように、巻四では、狭衣は飛鳥井女君の絵日記を源氏宮だけには見せたいと思う。源氏宮だけがその価値を理解できると考えるのである。飛鳥井女君は故中納言の女であったが、両親を失い、兄も修験道の僧となって、貴族の生活圏からは脱落してしまっているのだが、そのような女の書いた絵日記を正しく評価するだけの力をもっているとは、貴族の慣習的な生活や文化という枠組みでは測れないものをも判断できる鑑識眼や心を、源氏宮はもっているということではないのだろうか。

そして、このことは、巻一冒頭付近に置かれた、狭衣が賤の男に同情する場面と対応しているように思われる。

中將の君、内裏よりまかり出たまふに、道すがら見たまへば、菖蒲あやめ引き掛けぬ賤の男なく行きちがひつつ、もてあつかふさまども、げ

に、かく深かりける十市の里のこひちなるらんと見ゆる、足もとどものいみじげなるも知らず、いと多く持ちたるを、いかに苦しかるらんと、目留まりて

うき沈みねのみなかるる菖蒲草かかるこひちと人も知らぬに
と思さる。
(巻一①三〇頁)

「こひち」は恋の道と泥地との掛詞である。歌世界ではそれはことに留まるものになりがちであるが、『狭衣物語』世界では、賤の男が足も泥まみれになって労働している姿を、主人公の体験と直接的に結び付けている。作者は狭衣を他者に対する哀れみ・同情を感じることでできる人物に仕立て上げたいと願っているのだろう。源氏宮への思慕の苦しみが他者の精神の苦しみの理解へつながり、肉体労働の苦しみへの同情にもつながって、他者への哀れみの感情を強化するという物語の論理である。

貴族性からの離脱という意味で、このような狭衣と源氏宮には明らかに共通点がある。源氏宮は、狭衣と同様に、様式化されすぎってしまった貴族性にこだわらず、美や苦しみに敏感な人物なのである。

ここまでの考察からは、源氏宮の美しさは、外面のそれだけでなく、内面から無造作に浮き出してくるものであることがわかる。ところで、そのような源氏宮を実の娘同様に育て上げたのは、狭衣の母である堀川上であった。狭衣は堀川上を「あくまでらうたげに、親とも見えさせたまはず、若う見えたまへば、親と申しながら、(堀川の大官からの)すぐれたまへる御思ひ、ことわりぞかし」(巻一①六七頁)、と見ている。⁽²⁾

堀川上の性格上の特徴を示す逸話としては、女二宮降嫁が挙げられるだろう。帝からの降嫁の要請に対し、堀川大臣が階級的な発想からそれを狭衣に強いるのに対し、堀川上は狭衣の心を尊重する。⁽²²⁾このことが必ずしも先例を重視しない発想というものであると断定することはできないのであるけれども、女二宮の母宮が皇女と結婚について慣習的な理想にしがみつこうとしていたことを思えば、自由な見方といえるのかもしれないと思う。

狭衣はそのような母を素晴らしいと思ひ、その母に似ていてかつ彼女から教養を授けられた源氏宮に深く魅せられている。従妹であるといひながら、源氏宮は「恋しく思う母」の子という意味で実の妹と変わることはない。実の妹として育てられたからこそわかる彼女の明るい性格、慣習にとらわれない感じ方も含めて、狭衣には源氏宮が至上の美を備えたものを感じられるのである。⁽²³⁾

四 源氏宮の成長

ねび整った源氏宮が「光」と表現されるようになることはすでに述べた。『狭衣物語』は、源氏宮の内面的に成長していく様もまた描きだしている。

源氏宮の発話は歌を除けば極めて限られており、冒頭の場面で、狭衣から藤と山吹を差し出されたのに対し、山吹の花を選びとりながら口にする「花こそ花の」(巻一①一八頁)、これまで見てきた狭衣に恋を打ち明けられる場面で、狭衣の「いと暑きに、いかなる御書御覧するぞ」という問いに答えることば「斎院より絵ども賜はせたる」(巻一①五八

頁)、そして、狭衣に女宮たちの筆跡の優劣を聞かれて、「いづれもかしげにこそ見ゆれ」(巻四②三三二頁)と答えるのみである。前の二例に源氏宮の内面が直接的には現れていないことは明白であるが、最後の例でもまた、狭衣はそのことばに「あぢきなう」感するので、源氏宮の真意はやはり語られていない。

源氏宮の心中もまた、狭衣が恋を打ち明ける場面までは全く書かれていない。⁽²⁴⁾狭衣がその心中を告白したときには、源氏宮は「恐ろしうわびし、と思したるより外事なき」(巻一①六一頁)であったとある。人々の気配に狭衣が立ち去ってからも、源氏宮は伏したまま動くことができないうでいて、奥に入つてのち、以下のようにであったと語られている。

宮はやうやう物覚えさせたまふままに、かくもの恐ろしき心おはしける人を、またなきものに思ひきこえて、明け暮れさし向ひたりけること、さるべき人々に離れて生ひ出でけるよなど、初めてものはれに思し続けて臥し暮させたまひぬる」(巻一①六二頁)

堀川悟氏が指摘するように、⁽²⁵⁾ここで源氏宮は自分が養女であることの意味を肌で感じ取ったに違いない。

狭衣から恋を打ち明けられた源氏宮が「臥し暮ら」すという展開は、紫上の新枕を想像させる。紫上に起ったのは身体性を伴う現実の理解と受け入れであるが、源氏宮に起ったのもやはり、現実を受け入れることと精神的な変容であつたろう。

この場面で不思議に思うのは、源氏宮の女房達は、源氏宮の様子がお

かしいことにさして関心を払わずに、狭衣が恋情を告白するに至った在五中將の絵を見て遊ぶ姿が描かれていることである（「人々、絵ども散らして見ける」（巻一〇六二頁）、内閣文庫本を底本とする岩波古典文学大系大系では「人々、繪取り散らかして見ける」（五七頁）。流布本、古活字本では、この一文は明記されないが、源氏宮が女房たちからは離れて一人で過すことには違いない）。それゆえに、源氏宮は孤立しているかのような印象を読者は抱く。源氏宮と女房たちの対比は、いくつかの意味をもっていると考えられる。ひとつには、在五中將の絵を空ごとと考えることのできる人々に対し、源氏宮はそうではなくなったことの視覚的な構図をみせる目論見が挙げられる。そして、そのことと対応するが、源氏宮の精神的な孤立、もしくは、独立心とでもいうようなものを示す効果ももつことだろう。

その後、源氏宮は狭衣を避けるようになるが、それは当然の態度である。しかし、彼女は狭衣に恋を打ち明けられたことを、堀川上にでさえも、告発あるいは相談することはない。堀川上は彼女の控えめな態度から「この御前をば、隔てありて、な思ひまゐらせたまひそ。いとあまりなる御ものづつみに、いとうとうとしきやうに思しめしたるにこそ」（巻一〇九四頁）と狭衣にいうほどである。このことには、狭衣が母や父に心配をかけたくないと考えるところと同様に、源氏宮の養母、養父に対する配慮であったことだろう。このように大事も一人で対処してゆこうとする力は、先に述べた「精神的な孤立」を守ることでできるそれと通じている。

源氏宮の心情の変容のさまが明白に語られているのは、齋院に卜定されて後である。卜定されたこと自身について、源氏宮がどのように感じたかは書かれないのであるが、齋院となる準備のために大貳の留守宅に居を変えた源氏宮は堀川上に対してその不安を訴えている。

院は、いづくなりとも、一日も隔たらば、いかでかさはとのみ恨めしげに思ひきこえさせたまへるを、ことわりに心苦しうて、「尼にならざらんかぎりには、いかでかおぼつかなきほどにはなしはべらん、行く末のこと思ふぞ、口惜しうは」など、慰め申したまひながら、いまはとならん命のほど、身たてまつるまじきぞかしと思すはしのびがたくて、いまより思し続ける（巻二〇二七七頁）

「いづくなりとも」とは、内裏であろうと、賀茂の齋院であろうと、いずれであっても、という意味だと解釈でき、母と思ってきた堀川上に對して、源氏宮は、「一日も別れては生きておれない」と訴えている。狭衣の目からは大人のようにも見えていた源氏宮の心情が、親と別れることを現実的に把握しては揺れる模様が示されている。

それに対して、堀川上は、自分が尼にでもならない限りあなたに不安は与えませんよ、と言いながら源氏宮を案じ、また、自分の死の間際はこの娘が看取ることはないのだとしみじみと思っている。源氏宮の実際の親たちは早世しており、血縁という意味では養母にすぎない堀川上の死に際しても、源氏宮が齋院を退下することは考えられない。

この後、堀川上は源氏宮と多くの生活時間をともにするのであるが、

三年の時が流れて、源氏宮は賀茂川で禊して紫野院に入御する。その神域に入った源氏宮に対して、狭衣も「気近きも、あまり恐ろしければ、立ち退きたまふ」(巻三②一五七頁)とある。源氏宮のほうは、神域に、自分の宿世を看取する。

己のみ流れやはせむ有栖川岩もる主我と知らずや(巻三②一五三頁)⁽²⁶⁾

これまでの生活とは全く異なる空間のその景色を慈しみ始めた源氏宮は、その主は自分だと歌うのである。このような源氏宮には、堀川上に甘えた幼さはすでない。賀茂の齋王となること、その齋院のさまやそこを流れる有栖川を「契り深く御覧じやりて」(巻三②一五二頁)、その場にいる源氏宮には、果たすべき務めに対する責任を感じる姿とともに、それらへの愛情と自らへの誇りが感じられる。

平安時代中期以降、狭衣物語成立の頃まで、内親王や王女が少ない状況が続く中で、齋宮には藤原氏のキサキ所生ではない王女を配し、齋院には藤原氏血族の皇女を当てることが行われるようになる。⁽²⁷⁾伊勢という都から遠く離れた地よりも、邸宅に近い齋院に選ばれるようにし、しかも、卜定後数年も経たないうちに、病と称して退任するのが慣行化されていった。しかし、『狭衣物語』は源氏宮に齋院本来の境遇を与えているようである。

堀川大臣は源氏宮の宿世について、女一宮に次のように語る。

〔略〕かくひきたがへ、標の外になりたまひにしも、これこそはあ

るべきことと思ひながら、なほしばしば本意なき心地しはべりきかし。されど、昨日今日となりて思うたまふるには、いと目安き御宿世とぞ思うたまふる。女は高きも短きも、一筋によりてぞ、心より外にも人にもどかれ言はれ、さるまじき心のほどをも見え知られるるか。我が心と、あはあはしう、見朽たすことなけれど、おのづからそれに従ひて、あらずる人なくなりぬれば、身を心とまかせぬやうにて、はてはては思ひ嘆き扱ふめるに、命の限りはかく乱る心なくて、心のどかに過したまふべかめれば、世に侍らずなりなん後も、あながちに後ろめたいことも侍らざりけり。」(巻四②二二八頁)

命のある限り、心が乱れることもなく穏やかに過ごせるのはよいことであると、堀川大臣は言う。『狭衣物語』の作者、あるいは、読者たちが共有する、女であることの内面の苦しみを代弁した発言ではないのだろうか。源氏宮が多くを語らず、心情描写が少ないのは、ここで語られるような価値基盤の上に立っているのかもしれない。

しかし、源氏宮の境遇は実は決して安泰したものではない。堀川大臣は先のことばに続けて言う。

「ただ、仏の御方さまを背きたまへるのみぞ、後の世のため口惜しきことに侍る。それも女の身は、齋宮・齋院に定まりたまはずとも、三千大千世界を照らす玉の行方知らずは、仏になりたまはんと難くこそはべらめ。三十二相もよく具はりたまひて、仏の御身を

ば得たまへる。」(巻四②二二九頁)

齋院であることは仏に背くことであるから後生のために問題があるというのが一般的な理解なのである。堀川大臣は、それを打ち消すために「しかし、そもそも女であるということが後生を難しくすることなのだから、齋院であることがさらに負の方向に働くことはない」といい、さらに、いや実は源氏宮は仏身であるのだと、齋院の「罪深さ」を乗り越える力を源氏宮に与えていく。現世では男性優位の世の中に翻弄されることなくおだやかに過ごし、後世が約束されていることが、理想とする女君の生き方であると、堀川大臣は考えている。

物語に描かれた源氏宮に、堀川大臣のいうような仏身をもつことを裏付ける記述は見出し得ないが、源氏宮もまた齋院というものがどのような世間で認識されているかを堀川大臣のことばとおりに知っていたことは確かであろう。⁽²⁸⁾ 齋院については、『狭衣物語』の一世紀ほど前に成立した『枕草子』に「齋院、罪深かなれどおかし」と書かれている。⁽²⁹⁾ 齋院の罪深さという世間の見方を知った上で、源氏宮は入内ではなく、賀茂の齋院となる宿命を受け入れたと読み取れる。紫野の齋院は「おはしまし所などの、かりそめにもはかなき御屏風などばかりにて、あらはなるに、風さへ世にも似ず騒がしくて」(巻三①一五五)という粗末な住まいであり、華やかな入内とはまったく異なる世界へと源氏宮は歩んでいった。しかし、源氏宮はそれを契りと受け止める。生きている限り住み続けることになる居住地に親しみを感じる源氏宮の姿は清々しくもある。

『狭衣物語』の作者は恋愛至上主義に立ってはいない。『狭衣物語』は、女源氏であった源氏宮を、『うつは物語』のあて宮や、『源氏物語』の明石姫君といったヒロインのように帝の后にはせず、さらには主人公との恋もさせないで、自らの任務を負う齋院とすることによって、これまでの物語の型にはまらない新しいヒロインの創造を試みたのである。

五 おわりに

本稿では、もの言わぬヒロインとされた源氏宮の人となりと、その成長について考察した。物語は狭衣の視線に寄り添うようにしてしばしば書き進められるという事情もあって、源氏宮の心情はしばしば省略されているが、それでも、狭衣の恋情を含んだ眼に捉えられる美の表現から、その人柄を知ることができる。彼女の外見上やしぐさ、態度の美しさは、その内面性に拠るものである。源氏宮の特性は、狭衣と同じく、「愛敬」の語で表されている。狭衣の母である堀川上に育てられた源氏宮は、貴族の慣例や型にとられない自由な思考方法を身に付けた女君である。そして、京城守護神の花嫁である齋院に卜定されたことを自らの宿命と受け入れ、その役目を全うしようとする。

物語は、源氏宮が狭衣に恋の情を抱いたかどうかについては、かすかにも触れてはいない。それよりも齋院の役目を果たそうとする姿に、女君の成長する様を描きこんだ。これは、現存する先行物語には見られない特徴である。仏教が人々の生活と切り離されないものになっていく中、齋院は罪深いものであり、源氏上が一日たりとも別れたくないと願った堀川上の死に目を看取することもできない境遇であるわけだが、その

ような自己の宿命を受け入れられる源氏宮の様は、その覚悟といった心中の記述ではなく、齋院に佇む姿の美しさで表現されているのである。

注

(1) 引用は、深川本を底本とする新編日本古典文学全集『狭衣物語』を用いた。但し、『狭衣物語』の諸本間のテキストの異同を考慮にいて、意味内容に相異がある場合には、流布本を底本とする新潮日本古典文学集成『狭衣物語』の本文も引用する。①、②は新編日本古典文学全集の号数であり、掲載頁を添える。「上」、「下」は新潮日本古典文学集成二冊の上巻、下巻の意味である。

該当歌は、流布本では、「色々にかさねては着じ人知れず思ひそめてし夜はの狭衣」(上四一頁)となっている。

(2) 多くの研究者が指摘しており、たとえば三谷榮一氏は「飛鳥井女君や女二宮ほど登場する場面も多くなり、その外面的な具体的な服装・容姿・容貌についての美を強調するが、内面的な心中思惟の描写は極めて稀である。ただ狭衣が接する他の女性と対比して源氏宮の美を推測させ、また狭衣が思慕の情を独詠するなかからそれを推定させるにとどまる。」(三谷榮一「源氏宮と狭衣の恋」『狭衣物語の研究 異本文学論編』(笠間書院、二〇〇二年)収録、初出は『狭衣物語における源氏宮像の形成とその異本文学的研究(一)』(『実践国文学』一九八四年一〇月)という。

(3) 三谷榮一「源氏宮と狭衣の恋」『狭衣物語の研究 異本文学論編』(笠間書院、二〇〇二年)収録、初出は『狭衣物語における源氏宮像の形成とその異本文学的研究(4)』(『実践国文学』一九八六年三月)。

(4) 石川徹氏は、朝日古典全書『狭衣物語』(朝日新聞社、一九六五年)の解説で禊子内親王の母姫子をモデルとする説をとり、中城さと子氏は『狭衣物語』と禊子内親王(『愛知淑徳大学国語国文』一七号、一九九四年三月)で、モデルは禊子内親王自身と説く。

(5) 三谷榮一「源氏宮と狭衣の恋」『狭衣物語の研究 異本文学論編』(笠間書院、二〇〇二年)収録、初出は『狭衣物語における源氏宮像の形成とその異本文学的研究(一)』(『実践国文学』一九八四年一〇月)。

(6) 三谷榮一「源氏宮と狭衣の恋」『狭衣物語の研究 異本文学論編』(笠間書院、二〇〇二年)収録、初出は『狭衣物語における源氏宮像の形成とその異本文学的研究(1)』(5)『実践国文学』一九八四年一〇月〜一九八六年一〇月)。

(7) 堀口悟「源氏宮の孤愁」『狭衣物語』の女主人公をとりまく社会状況―『シオン短期大学研究紀要』36(一九九六年)。

(8) 『源氏物語』からの引用もしくは撰取の指摘はこれまでにも多くなされてきた。その引用のさまについては、稿者も『狭衣物語』飛鳥井女君の創造(『日本文学誌要』78、二〇〇八年七月)、『狭衣物語』の先行物語撰取の様相(『法政大学大学院紀要』61、二〇〇八年一〇月)、『狭衣物語』女二宮の造型―狭衣に対する機能を中心に(明治大学古代学教育研究センター紀要『日本古代学』2、二〇一〇年三月)で論じている。

(9) 阿部秋生「藤壺の宮と光源氏(一)」(『文学』岩波書店、一九八九年八月)。

(10) (9)に同じ。

(11) 山崎和子「藤壺における「おほかた」考」(『日本文学誌要』71、二〇〇五年三月)。

(12) 『狭衣物語』にも藤壺が登場するが、断らない限り、本論の藤壺とは、『源氏物語』の藤壺とする。

(13) 清水好子「源氏の女君」(『瑞書房』一九五九年)。

(14) 源氏宮が「幼き人」(巻一〇二八頁)という言葉で指示される用例が一例だけあるが、これは、狭衣の心に沿った表現で、源氏宮が幼かった過去を回想してのものである。

(15) 『源氏物語』では藤壺は「かかやく」の形容詞で表現されている。園明美氏はその「かかやく」と光源氏の「光」は同義とする(『源氏物語』の人物呼称)法政大学博士論文、二〇〇八年三月、後に『日本文学誌要』82号、二〇一〇年七月)。「狭衣物語」には「かかやく」の用例は少なく、「かかやく」を加えても四例である。

内閣文庫本を底本にする岩波日本古典文学大系では、「光」の語は次のように使われている。(頁番号は大系のそれである、以下の作業にあたり、塚原鉄雄、秋本守英、神尾暢子共編『狭衣物語語彙索引』(笠間書院、一

九七五年)を参照した)。

まず、「御光」という表現が四例あり、春宮により堀川家に威光がさすこと(巻二、一八九頁)、眼前に現れた普賢菩薩の威光(巻二、二二〇頁)、巻二での普賢菩薩の出現の回想(巻三、二二〇頁)、同様に普賢菩薩の回想(巻三、二八一頁)に用いられている。名詞の「光」は、巻一では、「月の光」(三三三頁)、狭衣の不在に対して「光なき心地して」(四二二頁)、「星の光ども」(四五五頁)、「狭衣の歌の中で」「いなづまの光」(四六六頁)、狭衣が中納言になり宮中に参上させるときに「光さし添ふ心地して」(八四頁)と五例あり、星月や稲妻という自然発光でなければ、狭衣に関係して用いられており、直接的にはないが、狭衣が「光」の形容をもつべき人物であることを思わせる。巻二でも、狭衣が大納言になり大将を兼ねたことが「何事も際殊なる光添へ給へば」(二二二頁)と表現され、また帝は狭衣を光で比喻して(堀川大臣は)「類なき光持たり」(一八四頁)と言っており、また女二宮所生の若宮をそれに違わないと判断する。また、「雪の光」(一七三頁)「月の光」(一八一頁)と自然発光のものを指すこともある。巻一になかった用例として狭衣の心中で、女二宮からの文を得られる効果があるという意味で「光」(今宵、などてかは、その光も難うは」(一四〇頁)が用いられている。ところが、巻三になると様相が異なってくる。「空の光」(二四九頁)と自然のものを挙げながら、そこで強調されているのは釈迦仏を思わせる狭衣の姿であり、「月の光」も「姥捨てならぬ月の光」(三二四頁)、「月の光さやかに限なくて、とそつ天までは、易く昇り給ぬべかんめり」(三二七頁)となって死後の世界を想像させ、さらには「月の光のあふ所もや」(三二六頁)と西方浄土を想像させる。灯の光も描かれるが、「御燈の光はほのかなる方へ御几帳を押しやりて」(三二〇頁)見えてくる世界は数珠を引きまわしてお経を唱える女二宮の姿である。また飛鳥井女君の歌に詠まれる「光」(二九八頁)では仏の加護を得たこと、あるいは、往生への導きのことである。「春の光」(三二九頁)も竹生鳥での出家修行を待つことを指し、このように見てくると、狭衣の出家への期待が「光」で表現されているようである。巻四では、賀茂神の歌に「光」が登場し、これは現世の人々にとっての狭衣を指す。堀川大臣は「ほのかなる空の光」(三四四頁)の中、狭衣の出家を引きとめる。こ

こから狭衣の再生の物語が語られるわけであるが、「月はなけれど、星の光けざやかなる」(三八一頁)、「佛の御前の御燈の光」(三八四頁)、「火の光」(三九八頁)、「雪の光」(四〇二頁)と、宰相中将姫君との逢瀬と係わって、夜の光が語られることになる。そして、また巻一、二と同様に、狭衣が「光さしそひ給」(四三〇頁)うことになり、夜の女どもとの語らいは「月影、もしは燈の光」(四三六頁)、「月の光」(四五九頁)飛鳥井女君との逢瀬を回想しての表現で行われることになる。「玉の光」(三八七頁)という語は、その中では特殊で、『玉の緒の姫君』という散逸物語を意識してのものである。

動詞の「光る」の用例は、巻一では、狭衣の容貌を「光り輝き給ふ御かたち」(三五五頁)、「ほの見給ふ御かたちの夕映、まことに光るやうなるを」(三八八頁)、「かたちはいとと光るやうにて」(四五五頁)、巻二でも狭衣の容貌に対して「花々と光る心地し給へる」(二五五頁)、「また様殊に光るやうにぞ見え給」(二〇九頁)、巻三では、狭衣の様子を「あたり苦しきまで光り輝くやうにて」(二七九頁)と書く。それに対して、本文でも触れたように、源氏宮の場合は「まことに光るとはこれを言ふにやと見たまへり」の同一の表現で、巻二で一回、巻三で一回繰り返して誉めたたえるのであるが(一九六頁、一九九頁、巻三二九五頁)、巻四では、若宮の容貌を「折しも、大人び給ふまゝに、あたりも光るばかりの御顔にて」(四四〇頁)という用例だけが見られ、源氏宮の場合も若宮の場合も、大人へと成長していく中で「光る」が用いられていることになる。巻二では、堀川大臣から狭衣への発話の中で「我も又、光るといふも」(二二四頁)という表現があり、帝の「この宮は、我目なればにや、『怪しうはあらじ』とこそ見ゆれ」(二二四頁)に引き続いていることを考慮にいれると、高貴な血筋のことを「光る」と言っているようである。流布本、古活字版の「光」の用例についても、同様の傾向が見られた。

(16) 流布本も同じく「御まみ、つらつき」となっており、伝為明筆本「御まみつらつき」2ウ(吉田『狭衣物語諸本集成』による。以下、同じ)、伝為家筆本「つらつきまみ」1ウ、伝慈鎮筆本「御まみつらつき」2ウ、伝清範本「つらつきまみ」3オ、紅梅文庫本「御つらつき」1ウ、飛鳥井雅章筆本「御まみつらつき」2オとなっており、紅梅文庫本に「まみ」がな

いということを除いて、身体の部位の指定は一致している。

- (17) 但し、深川本には巻四がない。新全集は平出本でそれを補っている。この場面は、しかし、内閣文庫本（大系）、流布本（新潮）ともにある。片岡利博氏は、異本間の巻四本文の異動から、流布本は混合本文であると指摘する（『狭衣物語巻四本文系統再考：かたしきにかさねぬ衣』、『文林』42、二〇〇八年三月）。「狭衣物語巻四本文系統再考（二）：なぐさの浜」、『文林』44、二〇一〇年三月）が、片岡利博氏が基幹本文と呼ぶ為家本（伝為家筆本）にも、当該場面がある。

- (18) 『狭衣物語』が先行物語を引用する際には、意味を反転させることが往々に行われる（拙稿『『狭衣物語』飛鳥井女君の創造』、『日本文学誌要』78、二〇〇八年七月）。ここでもまた、光源氏は藤壺に絵日記を見せ、狭衣は源氏宮に見せることはなかったというように、反転されている。

- (19) 例外的に、若宮の髪も「きよら」で表現されている。「きよら」の用例は異本による差があり、流布本ではさらに多くの用例がある。

- (20) 『源氏物語』では主に「愛敬づき」の用法で、光源氏、紫上、明石君、蛭兵部卿官、雲居雁、近江君などに対して用いられ、声・琴の音にも使用されている。

- (21) 流布本の狭衣は、堀川上を「あくまでらうたげ」（上五一頁）に見て、「親と申しながらも、（堀川の大臣からの）すぐれたる御おぼえはことほりぞかし」（上五一頁）、「人の親げなく、若うおかしき御有様」（上七二頁）、「類なくめでたき御有様」（下二一九頁）と感じる。

- (22) 堀川上は、気が進まないのであれば、参内することもやめてよいと狭衣に伝えている（巻一①三六頁）。これは、このあと狭衣が天稚御子に率いられるという事件が起こる伏線となっているのだが、本文で挙げた例と同様に、内裏を第一とするヒエラルキーに囚われない発言ともなっている。

- (23) 狭衣が母とその娘とともに着めたたえる例は、式部卿官中将の母尼君とその娘の姫君の場合にもみることができる。狭衣は尼君を堀川上よりも優れているように感じ、その尼君に託された姫君と契りを結んで、正式に妻として娶り、中宮の地位につける。狭衣が母よりも優れた女人を見出すことが、狭衣の大人への成長につながっていると、稿者は考えている。また、母と会見すること、その娘との恋の関係については、年頃の女君に

直接まみえる機会が皆無であるのに対し、その母とは、母が出家などをしていたれば、几帳などを介して会見することができたから、といった側面があるのではないだろうか。

- (24) (7)で、堀口悟氏が指摘している。

- (25) (7)に同じ。さらに、堀口悟氏は、堀川大臣の源氏宮への心情に功利的なものを見るのだが、稿者は、堀川上を特に慈しんでいる堀川大臣もまた、堀川上同様に源氏宮を慈しみ、ただ政治的な道具と思っているだけではなかったと読みたい。実の娘のように狭衣と分け隔てなく自分を養育してくれた堀川上や堀川大臣を思うとき、彼女には狭衣と結ばれる可能性は万に一もないだろう。

- 堀口悟氏は、源氏宮の乳母たちについて、生まれた当初からの乳母たちではないのではないか、という意見も提示している。その論拠には『源氏物語』に登場する乳母たちとの違いがあげられているのであるが、稿者は、狭衣もまた乳母の子に飛鳥井女君を連れ去られる辛酸な目を経験することから、乳母との関係が『源氏物語』のそれとは異なっている点を理解すべきであると考える。

- (26) 流布本では、「おのれのみ流れやはせむ有栖川岩もあるし今は絶えせじ」（下二一三六頁）。

- (27) 富樫美恵子「撰関期の齋宮・齋院の選定と斎王忌避の思想」（『寧楽史苑』47、二〇〇二年）。

- (28) 齋院に下せられた源氏宮が「いづくなりとも、一日も隔たらば、いかでかさはとのみ恨めしげに思ひきこえさせたまへる（巻二①二七七頁）」であったことからは、この時点では、源氏宮にとって入内と齋院には差異はなかったのではないかと察せられる。

- (29) 『枕草子』や『源氏物語』が書かれた頃を生きた大齋院選子内親王は、『発心和歌集』をのこしており、齋院と仏教が切り離されたものではなかったことがわかるが、平安末期から鎌倉期に著された『古本説話集』では、その巻頭に大齋院の説話を挙げ、齋院であることと仏教への帰依の大きな乖離があったことを描いている。